

# 南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

新連載

## 第1回 オンナー人、南の国を旅する

「何もなかったからいいけど、トラブルがあったらどうするつもり？」

ヤンゴンからプノンベンまでの飛行機は、子供時代に地元山口県を走っていたおんぼろバスに羽が生えただけの、小さな乗り物です。中を見回しても、日本人は私一人だけ。隣に座った陽気なインド人が、さかんに話しかけてきます。

夫に怒られるまでもなく、日本を遠く離れ、一人でアジアを旅するなんて、自分でも信じられない。しかもビジネス目的で。

何しろ、国内でさえ一人旅などしたこともない私です。海外旅行に行くときは、チケットの手配はもちろん、成田の出国手続きも、すべて夫まかせ。私の役目は、ひたすら荷物番。相手国に入国する時も、夫が書いてくれた入国カードにサインするだけなので、あれが何の紙かさえ、つい最近まで知らなかったほです。

余談ですが、家族でハワイに行ったとき、キャッシュカードやクレジットカードの入った財布を、ホテルに忘れて帰国したことがあります。チケットやパスポートなど、必要なものはすべて夫が保管していたので、家に帰りつくまで、自分のお財布がないことに、まるで気がつきませんでした。

そんな私が、一人で飛行機に乗り、日本語の通じない異国の地で、会社までつくるなんて！全く、人生は何が起きるか分かりません。

私が税理士になったのは、平成2年のこと。「カネなし・コネなし・客なし」、文字どおりゼロからのスタートでした。しかも生まれたばかりの息子をかかえて、普通の新人税理士ならたっぷりあるはずの時間も、私にはありませんでした。

それが今では、スタッフ30名をかかえる事務所にまで成長しました。弊事務所の特徴は、売上のすべてが本業からの収入だということ。何を税理士の本業というかはさておき、保険代理店もしていないし、何かを販売したり、コミッションをもらったりするような商売は一切していません。

弊事務所のコンセプトは、「中小企業の都合のいいオンナ」。ただひたすらに、クライアント企業のお金まわり・総務まわりのサービスを、地道に、どんくさく提供するのが、私のミッ

ションと決めています。だから売上は、100%中小企業からいただく、いわゆる「顧問料」だけなのです。

海外に「会計アウトソーシング」の会社をつくったのは、今年の1月です。なぜ海外なのか？と聞かれたとき、上記のコンセプトを考えたら、それは当然のなり行きでした。海外に出たいというクライアントがいて、それをバックヤードでサポートするのが私のミッションなら、私自身が海外に出るのに、何をためらう必要があるでしょう。ではなぜミャンマーなのか、という質問には、このシリーズの別の回でお話しますね。

ともあれ現在は、ミャンマー一の経済都市・ヤンゴンに、ジャパン・アウトソーシング・サービス株式会社を設立し、ミャンマーに進出したいという中小企業の支援をしています(ちなみにミャンマーの首都はネピドーにあります。ヤンゴンは、アメリカに例えるなら、ニューヨークというところでしょうか)。

今回のフライトは、商用でミャンマー AIR WAYというローカル航空の飛行機に乗って、ヤンゴンからカンボジアの首都プノンベンに向かうためです。

ミャンマーでは、物事が時間通りに進むことが、滅多にありません。というか、アジアの常識からすると、日本人は甘やかされすぎ。時間通りに出発するのは当たり前だし、あちこちに掲示板があり、何度もアナウンスがあります。

ここミャンマーでは、いつ搭乗開始かなんて、何のお知らせもなし。そろそろかなーという頃、空港バスがゲートに横付けになり、どうやら、あれがプノンベン行きの飛行機に搭乗するためのバスではないかと、あたりをつける。で、行先を係員に確認して、バスに乗り込む。バスを降りて、念のため、飛行機のタラップを上がる前にも、係員に確認する。何しろ、こちらの英語もあちらの英語も怪しいので、何度確認しても、し過ぎということはあります。違う飛行機に乗って、知らない国に飛んで行っても、誰も面倒をみてくれる訳ではなし…(汗)。

というわけで、隣に座ったインド人にもさりげなく確認する(笑)。

Where are you going to?

さて、間違いなくプノンベン行きの飛行機だということがわ

## ◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ22名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

かり、一安心ですが、これで一件落着とはいきません。実はこの飛行機、プノンベンに着く前に、シムリアップを経由します。シムリアップというより、アンコールワット遺跡のある場所と言ったほうが、皆さんには馴染みがあるかもしれませんね。

さて、シムリアップに着いたら、どうすればいいのか？降りるべきか、このまま乗っていてもいいのか、当然ながら何のアナウンスもありません。すると隣のインド人が、フライトアテンダントを捕まえて、シャイな日本人が聞けないことを全部、質問してくれました。

ふむふむ

とにかく全員降りるのね。

で、出発は何時何分？

大体1時間後ぐらいですかねー

「大体」？

「大体」って何？

フライトの時間、決まってないの？

どうやら、掃除が終わり次第、出発するらしい…。で、飛行機を降ろされ、ぞろぞろと歩きだします。ちゃんと、自分が乗ってきた飛行機を覚えておかなければ…(←必死)。

プノンベン行きの方はこちら～と、呼ばれる方に行くと、パスポートとチケットを見せろと言う。チケットの半券を渡すと、こすったら消えそうなマジックペンで、「トランジット」と書かれ、荷物検査を受けて、建物の中へ。建物の中は、アンコールワットのお土産品が、そこら中に溢れています。

「え、ここは、もしやカンボジア国内では！？では、さっきの荷物検査は、仮の入国手続きだったのね。」

私が不法入国者でないことを示す証拠は、なくしたら終わりの、小さな紙片に書かれたトランジットの文字だけです(汗)。と焦りながらも、これはラッキー！とまずは、アンコールワット土産のクッキーをゲット。でもね、ゆっくりお買い物していると危険、危険。

そこで、さっき乗ってきた飛行機が窓から見える場所をしかと確保し、チケットの半券を握りしめて、置いていかれないように、待つこと緊張の1時間。やがて、静かにプノンベン行きのフライトランプがつき、トランジットと書かれた半券をピラリと見せてゲートを通り、無事、さっきと同じ飛行機に戻ることで済みました。

隣のインド人も席につくやいなや、「Loooooong Way！」と言っていたので、やっぱり彼もハラハラドキドキしたのかなーと、親近感。

でも、こんなことでドキマギしているようでは、アジアでビジネスなんか、到底できません。日本の常識は世界の非常識とは、よく言われますが、日本人は几帳面すぎる。そして真面目すぎる。仕事の仕上がりに難癖をつけて(別にドアが曲っていても、閉まるから何の問題もないじゃん)、やり直しをさせた挙句、その分のお金を払わない。だから、アジアの人からみたら、日本人はただのケチな民族です。

アジアに行く前、私は自分のことを、とてもいい加減な人間だと思っていました。とくに土業の世界では、許しがたいほどアバウトなヤツです。だけど世界に出て、アジアの人からみると、なんて神経質な日本人！と、思われていることでしょう。

土業の人、または土業を目指す人は、本質的にコンサバティブです。私の本質もコンサバ。コンサバだけど、その中で一番イノベティブだから、ミャンマーまで行ってしまいました。私は、これからの土業に大切なのは、イノベティブな考え方を持つことだと思っています。だって、土業はこれでもかというくらい、イノベティブになっても、世間からみたら、ちょうどいい感じ(笑)。

というわけで、これから1年間、イノベティブでハチャメチャな私の体験談に、どうぞお付き合いくださいませ。

好評発売中

7人家族の主婦で1日3時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法

原 尚美 著(中経出版)

1,300円+税

「アタマのいい人」と「勉強のできる人」は、違います。勉強のできる人は、点をとるコツを知っているだけなのです。本書は、本番で実力以上の力を発揮して、難関試験に合格するための、超合理的な、大人の勉強法について書いたものです。

